

売茶翁研究

長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科

馬 叢 慧

本論文は、江戸時代に煎茶により有名となった売茶翁（高遊外）について、総合的に研究したものである。売茶翁は黄檗宗の僧侶でありながら、京都の街中で煎茶を売り歩いたことにより、当時の文人層を中心に大きく注目され、後世では煎茶における「中興の祖」に位置づけられる人物である。本論文では、従来までの先行研究で明らかにされていない諸問題を提起し解明に取り組むことで売茶翁についての研究をより深めることを目的とする。

各章の概要は以下の通りである。

序章「先行研究と本研究の目的」は、従来までの売茶翁についての先行研究を伝記、年譜、資料集、論文の四種類に整理し、先行研究における問題点と本論文における研究目的と研究方法を述べたものである。

第一章「売茶翁の伝記の研究」では、売茶翁の生涯について概観した後、江戸時代に作成された売茶翁の伝記3篇の記述内容の比較を行い、売茶翁の描写の変遷を考察した。これにより「賣茶翁傳」は売茶翁と親交のあった大典の著書であり、文人風の売茶翁が描かれたが、それ以降は、描写が簡略化抽象化されていき、次第に大衆受けする畸人としての売茶翁像の形成に影響したことが判明した。

また、伝記及び先行研究においても売茶翁の生涯には約10年間の空白期間があり、売茶翁は61歳から京都で通仙亭を開業し売茶を開始したことが従来までの定説となっていた。筆者は、伝記に加えて売茶翁の詩作の分析により、売茶翁がこの空白期間から売茶を実践していた可能性を指摘した。

第二章「煎茶史における売茶翁」では、江戸時代において煎茶を伝来した黄檗宗から、文人達の煎茶までの橋渡しの役割を売茶翁が担ったことを示唆し、煎茶史における「中興の祖」と位置付けられることを確認した。ただし、売茶翁自身の言動を鑑みると、必ずしも抹茶道の様な芸道化を求めていることから、煎茶道の中興と位置付けるには十分検討を要する。

第三章「売茶翁の交友」では、まず従来までの売茶翁の交友関係についての研究をまとめるとともに問題提起を行い、売茶翁と特に交友のあった文人や僧侶と交流を確認した。また、売茶翁と兄弟弟子にあたる大潮元皓との交友関係について、大潮の著作である「送賣茶翁再游洛序」と「和売茶口占 贈通仙亭主翁十二首」を詳細に分析することで、従来までの研究では十分に解明されていなかった、両者の関係性について考察を行った。

大潮の詩作を通じて、売茶翁に関する理解が極めて深いことが判明したとともに、大潮の売茶翁に対する尊敬や憧憬の念も明らかとなり、売茶翁にとっては知音とも言うべき貴重な理解者であったことを示した。

第四章「売茶翁の逍遥遊—脱俗、入俗、そして超俗」では、従来までの研究で指摘されなかった売茶翁の思想に見られる荘子の影響について考察した。まず、売茶翁の生涯を、売茶翁が煎茶を始めるまでの第一期、還俗し高遊外と名乗るまでの第二期、還俗後の高遊外時代の第三期に分類し、特に第二、三期の詩作の分析により、売茶翁の生涯には「脱俗、入俗、超俗」の特徴を見出した。

特に売茶翁の詩作は、『莊子』を受容した内容に満ちており、「坐忘」、「無用の用」、「虚舟」、「是非を破る」、「方外」、「形骸」、「無心」、「無為」、「虚」など荘子の思想における重要な概念が多用されていた。第二期では僧侶の身分でありながら俗世間へと「入俗」した売茶翁が、世間一般的な価値観を突き破る「茶」を売ることで、荘子の描く自由自在に物化の世界を敖遊することを理想としたことを明らかとした。これは従来の研究における「風顛」という禅の修行形式を売茶翁が理想とした、とするものとは異なる視点である。

また、売茶翁が還俗し、自ら「高遊外」と名乗って以降の第三期では、「俗」と「不俗」の境界線が無くなり、混在する「超俗」という特徴を見出すことができた点で、売茶翁の「逍遥遊」の思想の完成期であると言える。

終章では、本論文の全体的な結論と今後の課題について述べた。

以上の研究を経て、本論文では煎茶史において重要な位置を占める売茶翁について、これまで明らかにされなかった点を詳細に検討し、新たな売茶翁研究の方向性を提起した。とりわけ売茶翁に見られた荘子の「遊」の思想は、従来までの売茶翁研究においても指摘されなかった独自性あるもので、売茶翁という人物を究明する上で意義あるものだと考える。